

家族スポーツで コロナ禍を乗り越えましょう

新型コロナウイルス感染症は、スポーツにもさまざまな影響を与えました。この機会に親子でスポーツに取り組み、家族の絆を深めてみませんか。

コロナ禍のスポーツ

昨年は東京2020オリンピック・パラリンピックが延期となったことをはじめ、プロスポーツ、アマチュアスポーツを問わず、新型コロナウイルスによって大きな影響を受けた一年でした。

中学校や高校の部活動でも、全国大会や地区大会などが開催されず、涙をのんだ生徒も多かったことと思います。

そのような中、オンラインによるヨガ講座やダンス教室などが開かれるようになり、これまでには想像もつかなかったスポーツ教室が開催されています。

マラソンでも、オンラインマラソンという決められた期間内に決まった距離を自分の好きな時間に好きな場所で自ら計測し、アプリを使用して競い合う大会が、全国各地で開催されています。

このように、これまでの既存概念を取り払った新たなスポーツが始まっています。

親と子の絆づくり

スポーツを行うときも感染症対策が必要になり、これまでのように友達やチームでスポーツを楽しめなくなってしまった人も多いのではないのでしょうか。しかしこんな時こそ、気分転換も兼ねて親子(家族)でスポーツに取り組んでみませんか。親子でスポーツを行うことで、コミュニケーションが取れるだけでなく、子どもの成長を肌で感じることができます。運動前後のストレッチの際に、会話の時間や笑いが増えると同時にスキンシップを取ることもできます。さらには運動不足やストレスの解消にもつながり、心身ともにリフレッシュすることができます。

長引く自粛生活を、親子でスポーツを楽しむ時間が増えたと考えてみてはどうでしょうか。一緒に汗を流すことで、より強い絆が生まれることでしょう。

親子で参加できるスポーツ大会など

市では、親子でスポーツを楽しむことができる大会や講座の開催を予定しているので、参加してみませんか。

- 親子卓球教室
- 旭市飯岡しおさいマラソン大会
- 総合体育館内トレーニングジム ※高校生以上
- 健康ウォークラリー ※令和4年3月に実施予定の新規事業

あさひ輝いた人々 第31回

戦後の激動する 日本の最前線で 活躍した外交官

加瀬 俊一 (1903～2004年)



加瀬俊一は外交官として、ミズーリ号^(注1)の調印式に関わるなど、第二次世界大戦前後の激動期に、日本の外交の最前線で活躍しました。

明治36(1903)年、政治家加瀬禧逸^{きいつ}の五男として東京で生まれましたが、本籍は父親の出身地である旭市にありました。小中学生の頃は夏休みに帰省し、九十九里浜で遊んだそうです。

東京商大(現在の一橋大学)2年の時、外交官試験に合格し、外務省に入りました。英語の能力に優れていた俊一は、入省後英語研修生として国費でアメリカに留学し、さらにその力を磨きました。その後、大臣秘書官、英帝国課長、北米課長を経て、初代国連大使になりました。

ロンドンの日本大使館勤務時には、吉田茂大使(後の内閣総理大臣)の右腕として、イギリスのチャーチル首相とも会っています。

また外交官時代に、ロシア艦隊を全滅させたことで有名な、東郷平八郎元帥の通訳をしたことがありました。

第二次世界大戦が終わり、重光葵^{まもろ}外務大臣がミズーリ号の降伏文書調印式に主席全権で赴いた際、俊一も同行し、調印式の報告書を書く役目が与えられました。俊一はマッカーサー元帥の言葉を忠実に日本政府に報告したことで、日米両政府から高い評価を受けました。

第二次世界大戦前後に、吉田首相を補佐したり、昭和30(1955)年には、特命全権大使として、アジア・アフリカ会議の日本政府代表を務めたりするなど、外交官として高い力を発揮しました。

その後、慶応大学や京都外語大学で外交史を講義しました。

俊一は著書「あの時昭和が変わった」の中で「私は若いときによく学び、仕事に就いてからは若い才能に花を咲かせるように努力し、実践の場で修練を積んだ。いつも情熱と目標を持ってきた」と述べています。

注1 日本の敗戦時の調印式を行ったアメリカの軍艦。